

京都教育大学 F D ニュース

No.68

2013 年 12 月 10 日

京都教育大学 FD 委員会

2013 年 10 月 16 日の定例教授会前（13:30 ～ 14:20）に FD 研修会として「2013 年度の第 1 回 FD 研修会が行われました。本学では、従来から行っている学期末アンケートに続いて、授業中間アンケートがこの後期から始まります。学期末アンケートは授業が 13 ～ 15 回程度進んだ時点で行われますので、受講生からの半期間の授業評価という視点が強く、アンケート結果を踏まえた授業改善等が直接当該の受講生に還元されないという問題点がありました。この問題点は、本学が FD に手を染め、アンケート実施を行いだした時点から、アンケート実施時期をいつにするか、ということが毎年のように FD 委員会の中で議論になっていましたが、これは「そもそも授業アンケートとは何のために行うのか」ということと深い関係があります。アンケート結果をフィードバックすることによって受講生の学習意欲の向上を図り、恒常的な授業改善に資するには、受講生の現状やニーズに合わせて軌道修正が効く早い時期にアンケートを実施する方がよいのです。今回、教員の方々に 4 ～ 6 回目での授業中間アンケートをお願いしていますが、決して他大学がやりだしたのでうちでもやらないと、として始めるものではありません。

さて、せっかく新たに授業中間アンケートを行うわけですから、これを機会に授業中間アンケートの先行実施例とその結果の活用法をみなさまにお知らせしようと、平成 25 年度の第 1 回の FD 研修会を行った次第です。題名は授業中間アンケートに合わせて、「授業アンケートって何のためにやるの？—学期半ばの授業アンケート—」で、FD 委員の内田利広氏、教育学科の田爪宏二氏、FD 委員の巻本彰一氏の順でリレー形式で行われました。



内田氏は、まず本学での授業アンケートの現状について話をされました。授業アンケートの本学での位置づけが、その目的で①学生の学習意欲の促進を図る、②授業担当者に教育活動の成果を確認し、今後の授業改善に役立てていただく、となっているが、「学習意欲の促進」や「今後の授業改善」に役立つ形になっているのか、という点です。本学のアンケート用紙の分析や集計後に授業担当者に配布されるレーダー



チャート、本学のアンケート調査実施率と回収率の変遷を踏まえた上で、他大学（京都産業大学、龍谷大学、愛媛大学）における授業アンケート改革の取り組みを話されました。

京都産業大学では、学期内に2種類のアンケートを実施していて、一つが教員－学生間の授業に関する対話シートで、もう一つは学習成果の実感調査です。龍谷大学では、全学統一フォーマットによる授業評価アンケートを期末に実施し、学期半ばに質問用紙を用意し、任意による授業改善アンケートを実施しているようです。愛媛大学ではMSF(Midterm Student Feedback：中間期の振り返り)としてコンサルタントが授業の教室に入り、学生のコメントを聞き取ることをしているようです。

このような授業アンケートの改革に至った背景を京都産業大学を例にすると、①実施率・回答率の問題があり、授業時に配布・回収するやり方では教員参加率・学生回答率の頭打ちが起こっていること（これは本学でも、近年調査実施率は約90%、回収率は8割弱で頭打ちになっています。）回収率を上げるためにWebによる回答にしたところ、さらに回収率が低下したこと。②授業アンケート改革の方向性として、「アンケート疲れ」や「やらされ感」からの脱却が必要なこと。③また「よい授業」に対する考え方が、学生では授業のやり方がよい授業であり、教員ではコンテンツがよい授業と考えているので、学生と教員間でコミュニケーションが必要だと考えられるからです。

フィードバックの時期・方法にも問題があり、学生へのフィードバックがその学期中にできないこととWeb(HP)を介してフィードバックしても学生は見ないこと。また、教員へのフィードバックも、学期中に集計結果をフィードバックできないし、返却後は各教員の改善努力にゆだねられている点から、授業アンケート改革の方向性として、当該学期中のフィードバックや組織的なFDの視点が必要であること。他に、授業アンケートに対する教員の不信感（まじめに回答しているかどうか分からないデータを自分の評価に反映されたくない）、というものがありますが、これは結果の一部が教員評価とリンクしていることから生じているようです。

以上のことを鑑みて、新たな授業アンケートに必要な視点とは、①当該期間中のフィードバック、②教授法や進度に関する学生と教員とのコミュニケーション、③組織的FD、④「やらされ感」からの脱却であり、「教育の質保証」を目的とした、学部カリキュラム改善、教員個々の授業改善のために有用なデータが収集できるアンケートの実施を行う必要があると結論づけられました（この考えの流れは、本学のFD委員会での道筋と非常によく似ています）。そこで、教員－学生間の対話シートを、授業評価ではない各科目における授業の進め方について、①教員と学生間の対話を促進すること。②当該期間中に学生へフィードバックし、授業の進め方を調整すること。③対話することが目的であるので、シートは独自に作成したもので可なこと。④実施時期は第1週目から第6週目の間とし、原則的に全ての科目で実施すること、というものでした。受講生へのフィードバックの仕方は、アン

ケートの内容は授業担当者が確認し、対応策について受講生に口頭で回答する方法で行い、最後に授業担当者が、フィードバックの有無、結果の授業への反映方法を報告書に記入して提出する、という実施方法で対話シートの導入を行ったようです。

対話シートの導入後、教員へのインパクトはかなりあったようです。各教員の問題意識に応じ、アンケートの実施内容・方法に教員独自の様々な工夫が見られるようになりました。学生生活を把握するための意識調査や学習に困難を覚えている学生の早期発見・個別対応にも活かされることになったようです。また、丁寧にフィードバックする教員の姿勢がクラスの活性化につながり、集計結果とその対応策を記載したレジュメを配布したり、対話する時間を設けたことでオープンにいろいろと反応してくれるようになり、クラス全体の雰囲気よくなるという効果があったようです。

翻って本学ですが、学期半ばのアンケートをとられている授業担当者は、知識を確認する小テストに近いものまで含めるとかなりの数になると思います。そのなかで連合教職実践研究科の笠沙知章氏から当該研究科の状況をお聞き出来ましたので、その実践例が紹介されました。

連合教職実践研究科は授業公開週間が6月下旬にあり、5月上旬に公開可能な科目についての一覧を公表し、広報を行っています。それゆえ、該当の授業は外部の学生、教職員、教育委員会関係者、もちろん本学の学生や教職員も参観が可能です。また、一つの授業を指定し、原則として教員全員がその授業を参観し、その参観を踏まえて後日授業研究会を実施するという授業研究会も行っています。年に1回、院生代表と教員とで意見交換を行う場を設定し、カリキュラムや授業・院生指導についての意見を聴く教員-院生協議会が設置されています。教員、院生が全員出席してカリキュラムや授業について意見交換を行うFD集会を平成24年度までは年1回、平成25年度からは年2回のペースで行っています。

田爪宏二氏は学生からの評価を授業運営に活かす取り組みとしてレスポンスシートをされていて、教育心理学の授業への導入事例の紹介がありました。この授業は前期科目で、平成25年度には受講生が82名という人数で、本学としては大人数の授業です。各章(単元)が終了した週の最後に記入する方法なので約2週で1度行い、記入時間は10～15分程度だそうです。レスポンスシートの記入内容は、記名式で、講義内容の自分なりのまとめと授業に対する感想や質問を自由記述で書く形式になっています。



レスポンスシートを行った効果としては、授業改善の点からは、学生の学びの様子を点検し、授業運営の改善に役立てられたこと。また、次週の授業の冒頭に、意見や質問事項のうち代表的なものを紹介し、学習内容のフォローアップが行えたことが授業改善として効果があったようです。この取り組みの留意点としては、レスポンスシートは学生の学びの状況を把握することにより授業改善をしようとするものですので、授業自体に対する学生の評価が中心でないことと、記述式であるため数量的分析には適していないこと、記名式なので学生の本音が聞けないことです。

冒頭でも述べたように、できるだけ早い時期に授業担当者がリアルタイムに授業に関する要望を把握し、今後の授業改善に役立てる（軌道修正ができる）アンケートと授業評価の視点が強い期末でのアンケートは兼ねることはできず、やはりおのおの別々に行うべき、という結論に達し、実施要領等を FD 委員会では練ってきました。口頭での質問では、学生は正直に答えません。授業での知識や理解度を問う小テストやアンケートでは、授業



の理解度は把握できますが、学生の授業に対する要望が分からないこと、自由記述ばかりのアンケートはあまり書いてくれないのが実情です（少人数授業だと特徴ある文字を書く学生では、無記名式にしても、筆跡鑑定で特定されると危惧しているのかもしれませんが。）

無記名方式で、授業の軌道修正や受講生のニーズをくみ取ることに特化した授業中間アンケートの実施例が巻本彰一氏から報告されました。アンケートの回答項目ですが、選択項目として、授業の難易度、説明のわかりやすさ、テキスト（配付資料など）のレベル、授業の進む速度、受講生の理解や反応の受け止め方、の計5項目で、自由記述が特によかった点と改善すべき点の2項目からなっています。これは、毎年同じように学生が入学してくるのですが、教育課程が変わったり、年度ごとの学生気質や男女比が異なるだけでも随分教えやすさが変わります。また受講生の理解や反応の受け止め方の項目は、特にオムニバスで授業を行っている場合、学期末のアンケートでは誰に対する評価なのか分からなくなりますので、こういう点は授業中間アンケートが大変活用できると思います。

みなさま、ぜひ、今年度後期（10月）実施の授業中間アンケートについて理解と活用を！

授業中間アンケートを実施された方には、後期試験終了後に、実施のご意見の提出をお願いする予定です（詳細は後日お知らせします）。こちらにつきましても、趣旨をご理解いただき、ご協力をお願いします。

+++++
 次回の FD 研修会のお知らせ

日時：12月18日（水）13:30～14:20

場所：大会議室（教授会前）

講師：太田耕人氏（附属図書館館長）

山本綾乃氏（研究協力・附属学校支援課）

小松崎敏氏（体育学科）

【講師は講演順】

テーマ：「授業力を向上する！」

新図書館、無線 LAN 等の変化する学内情報環境の活用方法について。詳細は別紙をご覧ください。

FD 委員会委員：安東（委員長）、村田（副委員長）、内田、藪根、巻本
 事務担当：高松、相原、大谷